3-10 歴史に残る大地震

琵琶湖の周辺に被害を及ぼした地震には、震源がプレート境界にあるものと、内陸の活断層にあるものとがあります。寛文2年の大地震は花折断層という活断層が活動して発生したもので、その際、安曇川上流地域の斜面が崩れ、比良山地西麓の榎村・町居村に大きな被害が発生しました。

また、平安時代後期と室町時代の内陸地震の際には、琵琶湖に津波が発生し湖北に到来したとの説があります。

1．琵琶湖周辺の歴史地震と震源

地震はその発生源によって、2011年の東北地方太平洋沖地震、あるいは東海地震、東南海地震のようなプレート境界地震(海溝型地震)と、1995年の兵庫県南部地震のような内陸地震とに大別されます。

近畿地方の内陸地震は、ユーラシアプレートの内部が割れてずれること（剪断）、すなわち活断層が動くことで起こります。個々の活断層の活動は千～数万年間に一度と推定されますが、近畿地方では数百の活断層が存在していることから、百年間に数度の割合で大きな内陸地震に遭遇するおそれがあります。琵琶湖の近辺にも複数の活断層があり、1854年の伊賀上野地震、1891年の濃尾地震、1909年の江濃(姉川)地震などが歴史に残っています。

2．寛文地震による被害

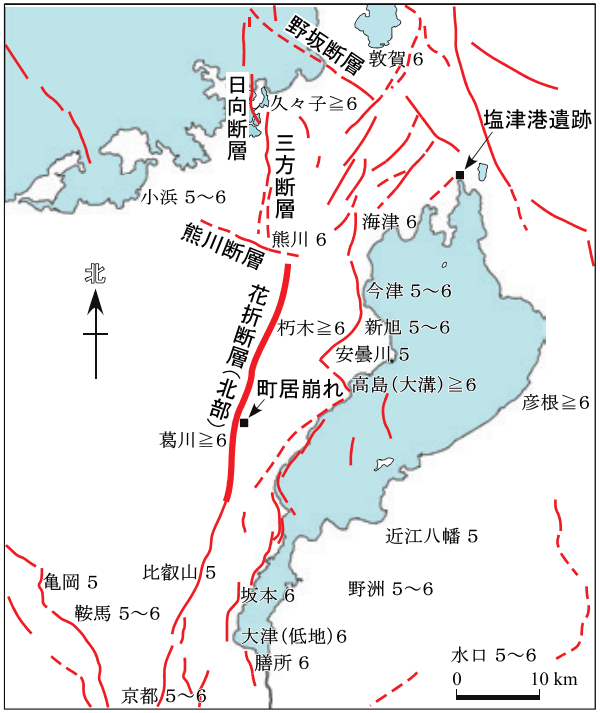
湖西地方を震源とする寛文地震(1662（寛文2）年)は安曇川に沿う花折断層と日向断層の同時的活動によって生じました（小松原、2006）。

安曇川の朽木谷上流部、葛川谷（梅ノ木集落東方で比良山地西側斜面）では、この地震の際に「町居崩れ」と呼ばれる大規模な斜面崩壊が発生し、ふもとの榎村・町居村では560人が犠牲になりました。崩壊土石は安曇川を堰き止めて天然ダムが生まれ、上流の坊村の家屋・田畑が冠水、それに続くダム決壊によっても大きな被害が出ました(今村ほか、2002)。

3．湖北地域に到来した津波

長浜市塩津港遺跡では、平安時代後期の神社遺構の掘っ立て柱の多くが湖岸と反対の北側に約10度傾き、社殿北側の堀に5体の神像が埋没、遺構面は最大厚5cmの細砂層で覆われ、さらに多くの噴砂跡が見つかりました。これらのことから、本遺跡は1185(元暦2)年の地震の際に琵琶湖で発生した津波の襲来を受け、社殿や神像が陸側（北側）へ流されたとの考え(横田、2011)があります。

また、近隣の長浜市西浅井町月出には、「室町時代の応永年間に琵琶湖に津波が起こり香取神社が流出した」との伝承もあります(横田洋三氏談)。



◀図3-10-1
琵琶湖周辺のおもな活断層と寛文地震の際の周辺震度
地名右側の数字は震度を表す。
花折断層北部（太線）が寛文地震の起震断層と推定される。
宇佐美（2003）、西山ほか（2005）より作成

写真3-10-1　A谷とB谷（イオウハゲ）は寛文地震の際に斜面崩壊が発生した谷。C地点には、滑落し安曇川を越えた巨岩群が残る。
©Google Earth 2017
（2015年3月撮影）

写真3-10-2　安曇川西岸の斜面C地点（写真3-10-1）に散在する巨岩。
長径2メートルを超えるものもある。

神戸女学院大学　小倉 博之

【活断層】地下の岩盤や地層がずれた現象が断層で、そのうち最近数十万年内に活動し、今後も活動すると予想される断層が活断層です。